

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	シンポジウム
タイトル	病院が変われば在宅医療が変わる～医療連携から生活連携へ～
日時	平成 25 年 3 月 30 日 10 : 00～12 : 00
会場	真珠の間B
演者	愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター・櫃本 真事先生、同センター・小手川 雄一先生、長崎大学病院 医療情報部・松本 武浩先生、同病院 地域医療連携センター・川崎 浩二先生、名古屋大学医学部大学院医学系研究科 地域包括ケアシステム学寄附講座・鈴木 裕介先生、神戸大学医学部附属病院 患者支援センター・内藤 純子先生
企画趣旨	<p>高齢化の急速な進行は、疾病構造の変革をもたらし、急性期病院の役割・あり方に大きな影響を及ぼしてきている。ほぼ完治して退院するといった従来の景色は一変し、疾病や障害を持ったまま退院せざるを得ない高齢患者の急増が、急性期病院においても例外ではなく、これまでの医療のあり方を根本的に見直す歴史的ポイントを迎えたと言っても過言ではない。今後の医療システムの改革に先行し、医療費抑制策が押し進められ、医療機能分化や在院日数の短縮化が重要な課題となったが、医師等医療者不足とあいまって、医療者の業務量の負担増加や、医療者と患者・家族とのコミュニケーション不足による信頼関係の低下などが、医療者を肉体的にも精神的にも追い詰め、特に勤務医には“疲弊”という形で顕著に現れた。“医療崩壊”と指摘されるこの状況を打開するために、医師不足等医療者の人員増が叫ばれているが、可能の是非はともかく、医療者が確保さえできたら解決するとは思えない。従来の急性疾患をターゲットとしたフレームのみに頼ることなく、“治す”医療から“求められる”医療への大きなシフトが必要である。そして医療への“依存”から“活用”するといった住民・患者らの意識変革、医療者と住民・患者とのパートナーシップの再構築、そして“医療を生活の資源”をミッションに、住民や患者が地域で安心して暮らせる地域づくりに向けて、病院自らが地域資源と協働することが不可欠だと考えている。</p> <p>このような中、院外に出すために、地域へ「つなぐ」連携に奔走してきたこれまでから脱却し、そもそも入院によって地域生活を「切らない」ための継続を目指した、“医療連携から生活連携へ”を掲げた取り組みにチャレンジしているところである。</p> <p>在宅医療ケアがなかなか進まない背景として、地域資源不足は否めないが、むしろ急性期病院や住民・患者に大きな課題があることに着目する必要がある。急性期病院が在宅医療を十分理解し、住民の生活を意識して、つまりその人らしい生き方・死に方を実現するために連携を図ることで、在宅医療を活用する突破口が開けると確信している。このパネルディスカッションでは、名古屋大学、神戸大学、長崎大学そして地元愛媛大学 4 大学の附属病院における、</p>

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

地域と連携して在宅医療を推進している取り組みの現状や課題を報告し、急性期病院がどう変わっていけば、本来の在宅医療ケアが地域で展開していくかを議論したい。